



ソクラテスの無知，科学者の未知と無知な大衆

塚原，東吾

(Citation)

化学, 79(6):54-55

(Issue Date)

2024-06-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本記事は出版社の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495788>



ソクラテスの無知、 科学者の未知と 無知な大衆

塚原 東吾

神戸大学大学院国際文化学研究科

「そんなことも知らないのか」といわれれば、そういう無知は単なる不勉強であり、恥ずかしいことなのかもしれない。だが研究を進めるうえでは、無知であることに意識的ならば、ポジティブなことであるという。無知は、それを「特定する」ことには意味があり、「特定された無知」を正当化することで、その無知は未知という研究資源になりうる。科学者は無知を未知と定義しなおすことで研究費が獲得できる。

知ること

無知に意識的であれという考え方は、「無知の知」を論じた哲学の祖であるソクラテスにも近い。自分が知らないことを自覚することが、知を愛する者にとって基本的な態度であるとソクラテスはいつていた。自分は、何も知らない(無知)ということを知っている。この知(無知)は無上の知である。知らないことは恥ずかしいことではなく、知らないのに知っていると思ひ込むことのほうがはるかに恥ずかしい。これがソクラテスの洞

察である。知っていることを誇るなかれ、むしろ知らないことを正直に告白して未知のことをもっと知ろう。それこそが、知を愛する者のとるべき態度である。そのように謙虚であれというわけだ。「われわれは何も知らない(無知である)」といたてるのは、実にラジカルである。彼は自らの「無知」を宣言して歴史に知者としての名を刻んだ。知をめぐる形容矛盾もはなはだしいといえなくもない。

だが、ソクラテス自身はそこまではないっていないし、後世の解釈でソクラテスの「非知」と、より高次の「無知」を混同しているとギリシャ哲学の納富信留は指摘している。詳しくは別に触れたいのだが、哲学者は洋の東西を問わず、無知について、よく似たようなことを論じている。たとえば孔子は、『論語』のなかで、「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らざると為す。是れ知るなり(知之為知之、不知為不知、是知也)」とのたまっている。知っていることを知っているとし、知らないことを知らないとするのが、知ることだ、

(だからそのところを知ることが大事だよ)、というわけだ。いつものように、孔子先生は、弟子からの質問に対して、物事を知るための姿勢を^{おし}誨えざとしてしている。

つくられた無知

ここでポイントとなるのは、無知には「非知」や「未知」なども含まれるということだ。納富によると、「知らないことを知っているといっている」ソフィスト(当時、哲学者を自称していた詭弁家たち)こそが「無知」なのだというのがソクラテスの真意だという。またお気づきかもしれないのは、孔子の言葉では「不知」である。このように、無知については、未知や不知、そして非知などがでてくる。さらにある知を意図的に隠すために、もしくは(ソフィストのように)自らの立場の優位性を示すために、論敵を無理やり「無知」に押し込めるケースもある。こう考えると、正当な知を「誤認」することや否定することによって混乱を招くこと、つまりソフィストのやり方は「無知」を助長する行為となるし、「無知」をつくりだす^{テクニク}高等な技法であるともいえる。いわば隠蔽工作や、偽のアリバイづくりだ。意図的な「無視」や「攪乱」によって、そもそも知や事実(真実)が見えなくなっていることも多い。いわば「無視によってつくられた無知」や、「攪乱による混乱で無知の状態になっていること」もある。さらに、ある知を混乱させることによって、「判断停止の状態に陥れること」も、「無知の生産」につながると考えて

もいだろう。

たとえば、沖縄の基地のまわりでPFASの濃度が非常に高いことは無視されてきた。そのことで、われわれはPFASについて、無知の状態に置かれていた。また水俣の経験では、有機水銀の汚染ではない別の化学物質を原因とする説が唱えられ、その確証を得るまでに長い年月がかかった。別の原因説を唱えた化学者たちは日本チッソから多くの研究費を得ていた。つまり彼らはある意味での情報攪乱の共犯者である疑いさえぬぐえない(ちなみに宇井純は、このような情報攪乱行為を、「中和」と呼んでいる。とても化学者のな命名だ)。

「無知学」のもつ意味

「無知学」の提唱者であるロバート・プロクターによると、無知の要因はさまざまであり、大まかに以下の三つに分類できるといふ〔プロクター、第2回(2024年5月号)であげた鶴田想人の翻訳を参照〕。

- ① 欠如として認知される、生まれたままの状態での無知(教育的に満たされるべきもの)、もしくは「資源としての無知」。
- ② 失われた、もしくは選択の結果の無知。土着的・伝統的な知識や、探究の優先順位がつけられないままの無知。
- ③ 戦略的に、一定の情報操作やフェイク情報によってつくられる無知、もしくは能動的な構築としての無知。
なるほどこういわれれば、科学

者や教育者たちは①を追求することが仕事になるのだろう。科学者は「資源としての無知」を有効活用して、欠如として認識したり特定した無知をせっせと埋める研究を進めると同時に、それを広める教育的な役割もある。教育者は欠如としての無知を埋めることを仕事にしているので、物事を知る前の「無知(未知で白紙状態)」の学生や生徒は、知をもつ科学者にとっての「資源」であるという見方もできる。②を追求することは、民俗学者や歴史家の仕事だろう。これについては一定の価値判断が伴っているので、また別に論じたい。

このなかでプロクターがとくに強調していたのが、③のいわば「つくられた無知」と呼ばれるものだ。強権的な国家や利益を優先する企業によって都合の悪い情報が隠され、正しい情報について「無知」な状態が作りだされていることは想像に難くない。

これは科学者には関係がないだ

ろうか? 思いだしてもらいたいのは、環境問題や食品安全など、社会的に大きな衝突をもたらす課題についてだ。多くの利害関係が絡む場合、科学の情報は操作されてきた。プロクターはタバコの健康上の害を例にあげて、企業側の科学者や宣伝マンは多くのフェイク情報やエセ科学の成果を垂れ流すことによって、一般大衆を「無知」の状態に置いてきた。もしくは広告代理店やメディアなどを通じて「無知な大衆」をつくりだしてきたとも主張している。いわば「意図的な攪乱による無知の生産」である。

ここで問題となるのは、「無知」とは何か、どのような状態で、どういう性質をもつのかについてのさらに詳細な分類や分析である。無視や攪乱も、意図的である場合や、無意識に行われている場合もあるというのが、「無知学」についての重要な課題の一つになっている。

つかはら・とうご ● 神戸大学大学院国際文化学研究科教授, 1987年東京学芸大学大学院修士課程修了, 1993年医学博士(Ph.D., オランダ・ライデン大学), <研究テーマ>科学史, 科学哲学, STS(蘭学, 化学史, 気候再現など), <趣味>ブラタモリと孤独のグルメを合わせたような感じで行ったことのない街を歩くこと, 淡水魚の水中観察